

公募文学賞を何らかのチート（不正）行為を用いてハックすることは可能だろうか？ 答はイエスだ。たとえば既存の作品の盗作。「パクリ行為」によって公募文学賞を受賞したが、その後不正が発覚して取り消されたという事件はこの日本で、近年に限っても複数回起きている。

生成A I を利用して作った作品は？ 文学賞には、生成A I の利用を認めているものもある。が、本稿を書いている2025年10月時点ではごくごくわずかのようだ。超然文学賞では第8回までの募集要項に規定はない。今回も筆者はその利用を想定せず審査に臨んだ。創作への生成A I の利用はそのうち当たり前になっていそうだし、筆者が知らないだけでそうなっているのかもしれない。超然文学賞の規定も今後それを織り込んで変わっていく可能性もある。しかし、現時点では生成A I を利用した作品の応募はグレーゾーンだというのが筆者の認識だ。

われわれ審査委員が全知でない以上、本賞においても応募作のチート行為をすべて見抜くのは不可能だ。個人的には信義則を前提に審査する。薄汚れてくたびれきった存在の代名詞である中高年男性の一人として、若い皆さんが持つ（いい意味での）プライドや志を信じるナイーブさは手放したくないという自己本位の面倒臭い感傷による。

さて。

あえて賞の傾向に言及するならば、今回の応募作にはジェンダーを題材とするものが多く目についた。学問や文学の領域で昨今その存在感を増しているトピックだ。いや、それにとどまらない。アメリカでトランプ大統領の第二次政権がジェンダーの多様性に否定的な政策を次々に打ち出し、危機感を抱いた人々がデモに立ち上がったニュースはまだ記憶に新しい。ジェンダーは同時代的に大きな政治的イシューでもある、ということだ。

政治的、という言葉、筆者は、二項以上の対立する立場を含意するワードとして俚上に載せた。たとえばジェンダーなら、その多様性を認める立場と否定的な立場という二項対立が容易に想起される。書き手の意識はどうあれ、読む者がつい、作者はこのイシューに対してどのような立場を採るのだろうか？ と考えてしまう題材だと言えよう。

ここで筆者自身の審査委員としての立場を表明すると、応募作の作者がどのような（政治的）スタンスを持っているかを、その小説の作品としての価値を測る指針とすることはしない。ある問題への“政治的アプローチ”が「正しい」から小説として評価したり、「正しくない」から評価を下げたり、といったことをするつもりはない、ということだ。「正しさ」は時代と共に移ろう。一方で文学あるいは芸術全般は連綿と紡がれてきたそれ自体の歴史を有し、その連続性は普遍かつ不変の価値という幻想あるいは志向によって担保されている、というのが筆者の考えである。芸術の価値を測る物差しの一つとして「真善美」という言葉がある。「真実」とは「正しさ」とは異なるものだとする立場であることも付言しておく。

さらに敷衍すれば、どのような題材を扱っているかで応募作に優劣をつけることもしない。それが現在、社会的あるいは学術的に重要な 이슈 だから高評価にするというのも、その逆もしない。それがどんな題材であれ、問題とするのはあくまで小説としての完成度だ。

ところで本賞はノンジャンル。応募作にジャンルの制限はない。たとえばミステリーの賞ならミステリーを測る尺度が、SF の賞なら SF を測る尺度がすべての応募作に適用できそうだが、本賞ではそのようなものはない。したがって、それぞれの作品にできるだけフラットに接して、その作品を評価する軸を作品ごとに設定する、という工程を踏むようにしている。リアリズムを志向する作品では「リアリティ」の有無あるいは精度をその作品の重要な評価軸とするが、リアリズムを志向しない、寓話的な作品やメタフィクショナルな作品では「リアリティ」を重要な評価軸とはせず、その代わりにメタファーのイメージ喚起力であるとか、文明批評の鋭さであるとか、ハイコンテクストの重層性やセンス等を重要な評価軸とする、といったことだ。

また、作品を評価するにあたって、古典や商業出版物をその比較の対象とすることもしない。そうした作品と比べても抜きん出たものがなければ高評価に値しないというのは——枚数制限の厳しさを加味すればなおのこと——高校生に対してハードルが高過ぎると思うからだ。本賞の過去の受賞作品を基準として比較することもしない。同じ回に応募された作品のなかで小説としての完成度を相対評価して、最優秀一作、優秀二作、佳作三作を選ぶ。

個人的な思い入れとして、本賞に入選した後も、なるべく長く創作活動を続けてくれる人を選びたいと考えている。この賞の出身者から将来作家になる人がいてもいい。そうした可能性を秘めた才能を一つでも取りこぼしたくないというのが審査委員としてのモチベーションになっている。

以上が筆者が審査に臨む姿勢である。断っておかなければならないのは、この基準はあくまで筆者だけのものであって、他の審査委員の先生方は必ずしもそうではないだろうということだ。審査会では、応募作がふるいにかけられ、入選作へと絞られてゆく。複数の審査委員が高評価をつけた作品でなければ、その過程で残るのは難しい。高評価をつけたのが筆者一人だったため、序盤で選外となった作品が今回は二作あった。

本賞の審査をするのはこれが三回目だが、年々、応募作全体の質は底上げされていると感じる。しかしワープロ原稿の読みやすさに関しては、内容の質にかかわらず改善の余地があるものが多く見受けられる。入選作等への講評の前に、ワープロ原稿における小説の体裁の一般的な約束事について、筆者が気づいた限りを箇条書きで記す。

■ワープロ原稿における小説の体裁の一般的な約束事（縦書きの場合）

- ・段落の最初は一文字分空ける（一字下げ）。会話文（「 」）も一つの段落と考え、その後、次の行に地の文を書くときは、やはり一字下げを行う。
- ・句点や読点（等）は、行頭に来ないようにする（Microsoft の Word であれば「禁則処理」で設定する）。

- ・会話文「 」の中の最後の文の後には句点（。）はつけない。
- ・縦書きの文章では、数字は基本的に漢数字を用いる。「18 歳」あるいは「1 8 歳」ではなく「十八歳」、「2025 年」ではなく「二〇二五年」のように書く。必要があつてアラビア数字を使いたい場合は、数字一つずつ半角ではなく全角にする。半角数字で縦書きにすると、数字が九十度横になるため。二桁あるいは三桁のアラビア数字をどうしても縦書きで使いたいのであれば、Word では「縦中横」という機能を使う。
- ・会話文等で間を表現する点々は、「……」のように、一文字分に点が三つ入ったものを二文字分続ける。三点リーダーと呼ぶ。句点を並べた「。。。」「や、ナカグロを並べた「・・・」は、何らかの狙いがある場合を除いては使用しない。
- ・文中に語句を割り込ませる場合は「——」のように、ダッシュを二文字分つなげたものでその語句を挟む。二倍ダーシなどと呼ぶ。
- ・「?」「!」「!?」のような記号の後には句点をつけず、かつ一文字分空白にする（※「 」内の最後に来た場合は空白にしない）。
- ・オリジナルな固有名詞（登場人物名等）には、初出時に読み仮名（ルビ）を振る。Word ではルビのコマンドから。Word では、ルビを振ると振った部分の行間が不自然に広がって体裁が変わってしまうが、それを修正する方法はウェブで検索されたし。
- ・ある語句の漢字を開くか閉じるかは、作中でなるべく統一する。「出来る」と「できる」、「下さい」と「ください」のように、同じ語句を閉じたり開いたりしたものが作中で混在することはできるだけ避ける。Word では校閲の「表記ゆれチェック」機能でチェック可能。

以下、入選作等の講評。

佳作『傘が咲く。』

主人公は、次男であるがゆえ家業を継げず、大学で就職活動をするものの希望する企業には入れず、地元のスーパーに就職した社会人二年目の男性。

高校のクラス会で、社会で華々しく活躍するかつての同級生らに再会し、引き比べて自分の人生がつまらないものに思えて落ち込む。スーパーでは遺失物係をしている彼は、あることをきっかけに、忘れられて「用済み」となった無数の傘にも、それぞれ持ち主たちの記憶や物語が宿っているのだと気づき、その気づきを通じて自分の仕事に新たな意義を見出し、前向きになる——という話。

主人公に寄り添った、一人称に近い三人称の文体は、粗削りだが自然に読ませる。応募作のなかである一定以上の水準に達しているのは間違いない。ただ、主人公の挫折感、シンボルである傘の使い方やそれを通じた主人公の自己発見は何というか教科書的で、手堅く「置きに来た」という印象も否めない。

しかし、高校生でありながら、あくまでこの現実世界を舞台に、二年目とはいえ社会人を主人公に据え、ディティールもないがしろにせずリアリズムの手法で迫ろうとするいい意

味で真面目な創作姿勢には好感が持てる。

今後は、小説でもっと大きな葛藤を描くことにぜひチャレンジしてもらいたいと思う。

佳作『白ユリが散るとき』

高校二年生の「俺」は、夏休みの短期バイト先で知り合った、中学卒で年の近い社員である「ゴリ」と、タメロで話し、仕事帰りに河川敷でキャッチボールをするほど親しくなる。ある日その職場に、やはり短期バイトで大学一年生の朱音（あかね？）が加わる。彼女を露骨に異性として意識し、仲を深めてゆくゴリを見て、「俺」は、自分が「ムカついている」こと、だがその感情は朱音への恋愛感情に由来しないことを自覚する。

白ユリの花束を渡して朱音に告白しようとするゴリの邪魔をするため、「俺」は、彼との友情を終わらせる覚悟で、ひそかにゴリのものより大きな白ユリの花束を朱音に渡す計画を進めるが——という話。

文章のテンポがよく、情報が無駄なく、だが不足もなく、的確な順序で提示されるため、読み口が非常にスムーズである。小説を書き慣れている印象を受ける。

「大人になるとはどういうことか？」という、思春期のクリティカルなテーマを、等身大の目線から、ひと夏の男女の三角関係を通じて描くクレバーな構成に、生々しい「俺」の情動が乗ったことでこの作品は小説としての読み応えを獲得した。テーマに対して安易な「正解」を示さず、ビターエンドに踏みとどまったところにも作者の書き手としての胆力を感じる。

高く評価する審査委員が複数いた一方、タイトルともなっている主要なシンボルである白ユリの花束の扱いが決定的にリアリティに欠けるという批判や、そもそも主人公とゴリとの関係に批判的な委員もいた。筆者は、「俺」とゴリはいいが、朱音のキャラクターにもう少し説得力が欲しかった、とする立場である。

佳作『存在のドレスコード』

大人になった「俺」（長谷川琥珀）のもとに、高校の同級生だった川原光希から、結婚式の招待葉書が届き、それをきっかけに、「俺」は、初恋相手であった光希との出会いと別れの記憶を思い出す——という話。

ジェンダーという題材と真っ向から取り組んだ作品である。残念ながら文集には収められないので、以下ネタバレを含む。

本作の核となっているのは、主人公で語り手でもある琥珀が、女性の肉体と男性の性自認を持つトランスジェンダーであるという設定だ。本当の自分を明かせず、家庭でも学校でも孤独だった琥珀が唯一自分らしくいられる場所が、自分一人しか部員のいない手芸部の部室だった。

琥珀は自分が創った裁縫作品の新作を、部室の外に置いた、「気に入ったものがありましたら、ご自由にどうぞ」と書いた段ボール箱に週に一回、誰かに届きますようにという祈り

を込めて投函している。それは、ありのままの自分を受け入れて欲しいという祈りでもあった。作品はなかなか引き取ってもらえなかったが、八週目にしようやく引き取り手が現れた。かつての幼馴染で、昔とは見違えるように女子らしくなっていた光希だ。二人は久しぶりに再会を果たした。琥珀が投函作品に使った「バテンレース」のことを知っていた光希も手芸部に入る。友人としての距離が縮まるなか、琥珀は（身体的には同性である）光希に「光希のこと、好きって言ったらどうする」と告白するが、光希は同性から告白されたと友人らに面白おかしく吹聴し、手芸部を退部してしまう。

筆者は本作を大変な力作であると評価する。

繊細な感性と地に足のついた観察眼に裏打ちされた一人称には、センチメンタリズムに流されないある種の潔癖さが筆者には感じられ、安心して作品世界に没入できた。

「俺」という一人称から、読者が男子だと思って読み進めていた琥珀が女子高校生だったことは、作中では光希への告白後に初めて明かされる。ミステリーで言う「叙述トリック」だ。審査委員からはこの仕掛けは不要だったのではという否定的な意見もあったが、筆者は、たんなるギミックにとどまるものでもなく、作品のテーマを濁らせるノイズにもなっていないと考える。

目新しいアプローチではないだろうが、叙述トリックによる反転は、読者に、ジェンダーというものに関する先入観に気づかせるのに効果的に機能している。叙述トリックは再読したときにその真価がわかるものだが、再読して、この作者が非常に周到に計算して作品を構想していることが理解できた。初読時に読者に違和感を覚えさせる、「フェアプレー」としての伏線も、琥珀と光希との会話のなかに自然に仕込んである（方言を使ったこの会話も生き生きとしてリアルだ）。

作中で主要なシンボルとなるのはウェディングドレスだが、そこへつながるバテンレース等にまつわる裁縫の描写のディティールが確かで、唐突感がない。作品内のすべての文章や会話、小物に至るまで計算し尽されて配置されている。光希への告白が残酷に裏切られ、失意のどん底で煩悶する「俺」のモノログでは「俺」「オレ」「私」という一人称を混在させ、「私」が「俺」を殺す決意を描くことで、作者は、イニシエーションにおける社会化で個のアイデンティティが疑似的な死を迎える場面を叙述トリックと不可分な形で小説的に処理している。同時に、読者はこの場面で、作者がテーマと真っ向から切り結んだという読み応えを得る。現実社会への解像度と構成力とが非常に高い作者がすべてをコントロールしたうえで使っている叙述トリックなので、作品のテーマと響き合っていると筆者は評価した。

本来であれば改行したいところや、空白行としたかったであろう部分が詰められていることから、既定の紙数に納めるために作者が推敲を重ねたことが推測できる。ラストではさらにもうひとひねりあり、じつは光希も琥珀と同じくトランスジェンダーであったことが明かされるのだが、ここがややとってつけたようになってしまっているのは、この紙数制限のためだろう。だが、構成としては筆者は支持する。

文集に収録できないのが惜しまれる作品だ。

優秀作『陸風』

語り手の「僕」は「竜」である。そのような言葉は使われていないものの、この「竜」が、はるか太古、この地球上に支配者として君臨していた恐竜であるのは明示的だ。「僕」は自らを、草食や肉食の竜が滅んだのち、「新生物になる」存在であると認識している。「体は小さく、羽毛が生えていて、肉と少しの草を食べ、後ろ脚だけで歩く竜だけが滅びを逃れる」と。すなわち、恐竜の絶滅後も生き残り、鳥類へと進化する種の一員だ。

恐竜が絶滅した大きな原因の一つに隕石の衝突があったとされることをわれわれは知っている。この作品のクライマックスでもそれを彷彿とさせる場面が描かれるのだが、「僕」なぜか、恐竜を待ち受ける命運をあらかじめ知っており、自らに降りかかった出来事も客観的に理解することができる。

この作品は、ある生物種の滅びゆくさまと、代わって新たな地上の支配者となる種が舞台に躍り出る瞬間を象徴的に描いたSFだ。

本作を評価できる最大のポイントは、恐竜の一人称という野心的な設定を見事に活かしてきたことだ。

なぜ「僕」は恐竜がたどる道を知っているのか、なぜ血のつながった母や姉とさえ異なり知性を持っているのか、その理由は作中で一切説明されない。そうした不親切な設計でありながら、この小説は一行目から読者を物語に引きずり込んで最後の行まで離さない。強いグリップ力を持つ文章がまず素晴らしい。

リズム感に富み、マクロとミクロの視点を自在に行き来して過不足なく、しかし豊かに竜たちの生と死、それらを包み込むエコシステムを生き生きと描出する文体が、この難易度の高い設定を軽々と飛び越えて、予定調和に収まらない、躍動感が横溢する作品として結晶させた。この軽業に筆者は小説を読む快樂を覚えた。作者もおそらく意識しているだろうが、この快樂は散文詩を読む感覚に近い。

「文化竜」を自称する「僕」はなかなかの皮肉屋で、他の竜たちを見下し、繁殖からも距離を置いているが、親を失った「暴君竜」の子供の保育者となる。達観した、突き放すような視線で過酷な自然界での生き物たちの生と死を見つめる「僕」は、滅びの瞬間にも超越した観察者であることはできず、避けがたい自らの死を前にして、自分も他の竜たちと同じだったと嘆く。

子を遺すことによってではなく、自分が進化することで個体の死を超克しようとする「僕」の衝動は、まったく「現実的」ではないがそれゆえに、われわれ人間が生物学的に見れば遺伝子のヴィークル（乗り物）でしかないという身も蓋もない現実にも異議を申し立てんとする意志と運動、すなわち文学と呼応する。

驚くべきことに、紙数にかなりの余裕を残しているにもかかわらず、本作は無常観を感じさせる堂々たるスケール感を備え、なおかつ読後の余韻を残すことに成功している。

文集に所収できることをうれしく思える作品だ。

優秀賞『リボンのことで』

第二次世界大戦下、語り手の「私」は、アーリア人でありながらナチスドイツによるユダヤ人収容所に入れられる。そこで死を迎える間際、祖国ポーランドで、弟と、近所の小川で出会ったゲオルグというユダヤ人の少年のことを思い出す。回想のなかで、自らがたどった運命や、弟とゲオルグにまつわるいくつかの秘密が明かされる——という話。

今回の応募作のなかで、最も挑戦的な作品だ。時代も舞台も現代の日本の高校生にとってかけ離れた、しかしながら設定に自由度のあるファンタジー世界ではない歴史的地理的に限定されたもので、なおかつ題材の核として、ナチスドイツによるユダヤ人の大量虐殺という、極めつけに取り扱いに注意が必要な 이슈を据えている。

これだけ高いハードルが設定された作品だからだろう、高評価もある一方、審査委員からは厳しい意見も多く出た。複数の先生方から、本作のディティールの不確かさやあやうさについて指摘が上がった。

筆者も引っかかるころはある。「私」が一度は収容所入りを免れるためにゲオルグを密告したのは「十五歳」。史実と前提とすれば、ポーランドをナチスドイツが占領したのは一九三九年九月なのでそれ以降の出来事のはず。ところが作中、一九四九年に「私」はベルリンで十歳の子供たちを相手に学校で教師をしている。はたして当時、十七歳かそこらで教師になるのは現実に可能だったのであろうか？

本作の小説としての最大の特徴は、ナラティヴ（語り）における時間操作の巧みさだ。

「私」の語りは自在に過去を行き来し、読者に時間軸に沿った出来事を再構築させる。このプロセスが非常にスリリングなものとなっているのは、たとえば、カギカッコを使わず地の文だけで会話のやりとりを表現する部分でも読者を混乱させずむしろスピーディに読ませるといった技巧に支えられた、作者のたくらみに満ちた小説設計の妙ゆえだ。

だがその一方、そうした操作によって、史実に照らせば不自然な設定がごまかされている可能性はないだろうか、という疑問も抱かずにはいられないのだ。

——しかし。

ここまでナラティヴの魔法を掌中に収めている作者に対しては、読み手も当然に「信頼できない語り手」まで射程を伸ばす必要があるかもしれないとも筆者は考える。

不自然な表現も散見されるが、無駄を削ぎ落とした抑制の効いた文体は、切れ味鋭いレトリックとあいまって、読む者に豊饒な行間を味わわせる。五感を呼び覚ます明敏なディティール、鮮やかで効果的なシンボル使い、躍動するイメージの数々。何より、人間の持つ醜悪さを通じて、どんな力でも奪うことのできない最後の人間性に迫ろうとするまなざしの強靱さ。

個人的には応募作中で他と一線を画すほど小説としての強度の高い作品であると評価した。

最優秀賞『誰でもなく、私』

十七歳の高校生である「私」は、シングルマザー家庭で掃除、洗濯、炊事といった家事をほとんどもっぱらにこなし、弟の弁当まで作っている。あるとき英語の教材で「ヤングケアラー」という言葉を知った彼女は、その言葉の定義は自分に当てはまるものの、それにまつわる記事やサイトを調べてみても、自分とは異なる、哀れむべき存在としてのヤングケアラー像しか見つけることはできず違和感を覚える。自分は母から頼りになると褒められ、感謝されることがうれしいから家事を手伝っている、決して哀れまれるような存在ではない——そう考えようとするが、ヤングケアラーという言葉の定義が心にとげのように突き刺さり、家事の負担がなく高校生の女子らしさを満喫しているような友人にいら立ちをぶついたり、これまで何の疑問もなく家族のためにこなしてきた家事への気力を失ったりする。

十八歳の誕生日を迎え、法律上は成人となり、ヤングケアラーの定義から外れた「私」は、自分はもうかわいそうと思われたり、逆に褒められたりすることもない「ただ同い年の子よりも少しだけ家事が得意な高校生」になったのか、シングルマザー家庭の娘であるがゆえ、これまで世間からはそうみなされなかった「普通」の存在になったのか、もしそうならばそれは幸せなことなのかと自問する。

迷いのなか、「私」は、習慣となっていた家事をこなすことで、心の平穏を取り戻す自分に気づき、世間からどう思われるかは関係なく、「自分の手で生活を作り続ける」日々「確かな誇りを持っている」ありのままの自分自身を受け入れる——という話。

題材と構成において、ある意味高校生による創作としての王道を行く本作は、応募作中最も多く審査委員から高評価を集めた。筆者もその一人だ。

社会学的用語に規定されることへに対する個人の抵抗を描くという初期衝動は文学的である。本作は、その初期衝動に忠実に、明確なテーマを、力強い構成と確かな文章によって、説得力を持って描ききっている。

何より魅力的に感じたのは、何気ない日常を形作る家事を描く作者の細やかな感性だ。ディティールを揺るがせにしない描写の積み重ねを通じて、幸福というものは、華々しい「成功」というような非日常ではなく、むしろ日々の暮らしのなかにこそ宿るものなのだと読者に感じさせる力をこの作品は持っている。

個人的には、欲を言えば、作者も語り手ももうちょっと暴れてよかったのでは、と思ってしまったというのも正直なところだ。

ラスト近くの自己発見によって自分を受け入れる前、語り手はそれまでの価値観が揺らいで精神的にどん底近くに落ち込む。物語の構造として見た場合、主人公が疑似的な死を経てイニシエーションを完遂する部分であると分析できる。このどん底は深ければ深いほど物語は起伏に富む。家事が「突然どうでもよくなってしまった」ところや、友人との関係の亀裂も、もっと壊滅的な方が物語がよりダイナミックになることは間違いない。筆者が同じ題材を扱ったとすれば、面白くしようとしてつい、そうした方向に物語を振ってしまうはず。

しかし、本作はそうした物語としての、エンタテインメント的な面白さにおいて評価されるべきではないのだろう。「私」に頼りきりだった弟には家事を手伝おうとする変化が見られるが、母親は変わらないところがリアルだと評価する審査委員がいて、筆者もなるほどと思った。

そう考えると、ラストで「私」が自己発見を通じて至る自己受容も、エンタテインメント的なハッピーエンドではなく、ビターエンドなのだと——“「これでいい」とは思わない。でも、「これが私」だと、静かに思える。”——納得できる。

本作は、精神的にも真に大人な人物像を描くことに成功した、静かな力を持つ作品だ。

以下、選外となった作品について。筆者だけが高評価をつけた作品は『パンタ・レイの卵』と『Acta Est Fabula』。他にも複数の審査委員の高評価を得た作品には『獣人科病棟』『躍動』『生前葬』『生け華』『ウィー・アー・ゲッティング・ハイ』があった。